

平成 30 年 8 月 1 9 日

アカツキファイブ女子強化試合観戦記Ⅳ

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

観戦記ア・ラ・カルトです。

一つ目は、全員がシュートに対して貪欲なことです。どのポジションの選手も、「空いたらシュート」という強い意思が感じられました。3Pシュートを例に挙げると、一度落としてすぐにチャンスが来た場合、普通は躊躇してしまうことが多いのですが、ほとんどの選手がすかさずチャレンジしていました。

そして、やみくもに自分勝手に打っているのではなくチーム全体で統制が取れていました。その裏付けとして、周りの選手がそのシュートのリバウンドにきちんと反応していたからです。サイズのある選手に限らず、コート全員が仲間のシュートに対する準備がなされていました。

オコエ選手や根本選手など、代表入りして間もない選手でも果敢に連続シュートにっていました。チーム全体の意思統一が見て取れました。

二つ目です。リバウンドです。高さでは到底カナダ代表にはおよばないのですが、下の表が示すように日本はリバウンドでもカナダを上回りました。

	OR	DR	TOT
日本	14	28	42
カナダ	9	24	33

《リバウンドスタッツより》

観ていて気づいたことは、DRのボックスアウトはまず半身で相手にコンタクトし、押し込まれないようにして早目に跳んでいたことです。選手別リバウンド獲得本数は、赤穂(さ)OR4、DRが2、赤穂(ひ)がOR4、DRが1、高田のDR4、長岡のOR1、DR3、根本のDR3でした。中でも赤穂(ひ)は、仲間のシュートに対して常に反応しリバウンドに絡んでいました。数字には表れていませんが、取れそうもない時はチップアウトして相手に簡単にボールを渡しませんでした。もう一つの注目点は、ガード陣の町田がDR2、三好がDR2、水島がDR2とリバウンドに絡んでいたことです。9月22日からスペインで行われるFIBA女子ワールドカップでは、日本はリバウンドが生命線となります。1つの道筋が見えました。

三つ目はチェンジングディフェンスです。主たるディフェンスは、ハーフコートマンツーマンディフェンスですが、流れを変えたい時、オフェンスが停滞した時、一気に攻めたい時に3/4のゾーンプレスを使っていました。1-2-2と2-1-2の使い分けです。1線が奇数のゾーンプレスは、基本的にはボールをどちらかのサイドに追い込む。1線が偶数の場合は、ボールの運びに難があるガードの場合に、一気にダブルチームに行くことや、コート中央へのフラッシュを阻止する時に使います。今回は場面を想定して、トラップやパスカットのタイミングを試していたようです。

まとめです。ずばり女子日本代表の攻守に『力強さ』を感じました。その源は、『自信』だと思います。背景には『リオ五輪ベスト8』があります。メンバーは若干替わりましたがワールドカップでの活躍が大いに期待されます。9月22日から始まる初戦の相手は、スペイン(世界ランキング2位)に決まりました。**がんばれ!!!アカツキファイブ女子日本代表!!!**